

ウム・カイスにおけるローマ帝国から ビザンツ帝国への移行(その3)

—国士館大学ヨルダン、ウム・カイス遺跡調査—

松本 健 国士館大学イラク古代文化研究所共同研究員

The Transition from Roman Empire to Byzantine Empire in Gadara/ Umm Qais (3): Excavation at Umm Qais, Jordan, Kokushikan University

MATSUMOTO, Ken co-researcher, the Institute for Cultural studies of Ancient Iraq, Kokushikan University

松本
健

1. はじめに

ウム・カイスは北ヨルダンの都市ヤルムークから西へ約 20 km に位置する。古代名はガダラ(Gadara)と言われ、ヘレニズム時代からレバント地域に存在する 10 の都市の連合体(デカポリス)の一つとして知られ、経済、文化の中心的な都市であった。

ウム・カイスは 1860 年からシューマッハーによる踏査、その後のドイツプロテスタント古代学研究所によって、発掘調査、保存修復が進められ、今までに、デクマヌス・マキムス(大通り)、テラス、五廊式パシリカ、西円形劇場などが明らかにされている。時代

はヘレニズム時代からローマ時代、ビザンツ時代、ウマイヤ朝に至る時代である。近年はヨルダン考古庁、ヨルダンのヤルムーク大学も発掘調査を進めている。

国士館大学文化遺産研究プロジェクトは 2005 年から 2010 年まで文科省学術フロンティア事業「戦後イラクの社会基盤としての文化遺産学研究」が採択され、同時に JICA、UNESCO、ヨルダン考古局共催、国士館大学協力によって「イラク向け第三国文化遺産復興のための研修」がヨルダン、ウム・カイス遺跡において 5 年間行われた。

その後もウム・カイス遺跡での JICA による文化遺産研修の 2 年間のフォローアップが行われ、そして国

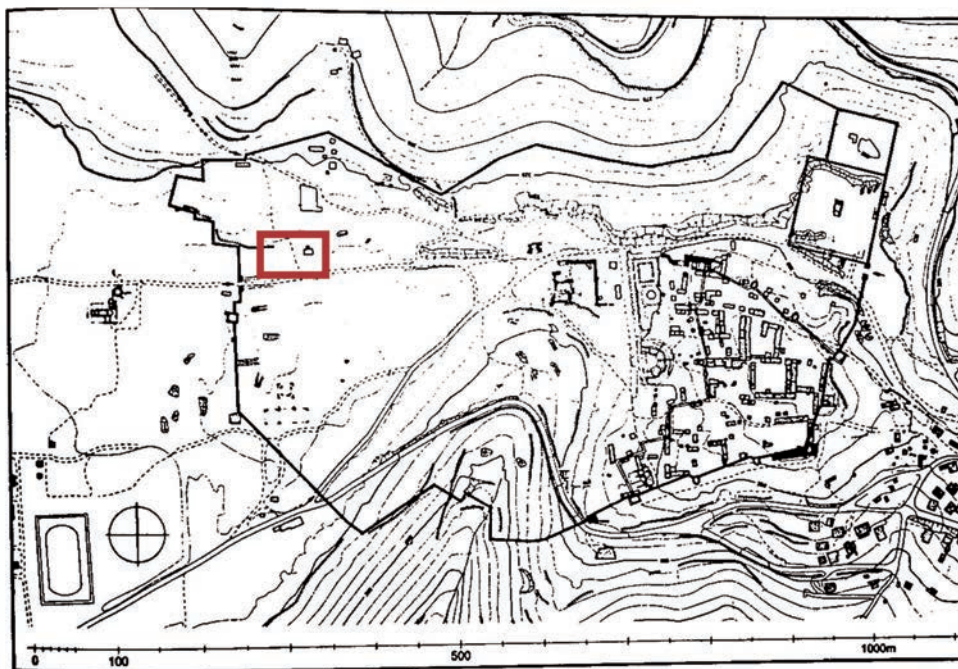


Abb. 35. Kaiserzeitliche Stadtmauer (BD 1), Rekonstruktion des Gesamtverlaufs, nach A. HOFFMANN/C. BOHRIG 2000.

図 1 ウム・カイス遺跡(□は国士館大学発掘調査区域)



図2 中央に Decumanus Maximus(大通り)、Bil.1、Bil.2、Bil.3、Bil.4、Bil.6、八角堂、フォーラム

士館大学文化遺産プロジェクトによる発掘調査、西円形劇場の修復などが進められた。しかし2015年以後、中東に混乱、さらに2019年からは新型コロナウイルスの世界的拡散が生じ、渡航禁止となり、現在に至っている。

2. 国士館大学発掘区域

こうした中、国士館大学文化遺産プロジェクトの発掘区域は、ローマ時代の市民の生活を明らかにするという調査目的から、初期ローマ時代の市門(Early Roman Gate)と市壁の内側に位置する低地域に設定した。

3. 発掘調査の結果

3.1. 地下墓など

北側に降って斜面をなす石灰岩の岩盤を削り貫いて

地下墓が造られていた。そのほかには斜面に土留めと思われる厚い壁が建造されていた。これらは後期ヘレニズムと推定される。

3.2. ローマンハウス(Bil.4)

岩盤の直上に、邸宅と思われる遺構が発掘された。岩盤上に中庭を囲んでイオニア式の柱頭を戴いた円柱が立てられ、その周りに各部屋が造られていた。また地下室も付設されていた。その地下室から出土した土器、ランプなどは後期ローマ時代と思われる、そして地下室で採集されたカーボンのC14年代測定を行ったところAD130~260、AD70~230、AD130~260の結果であった。即ちAD130~260ころローマンハウスは放棄されていたと思われる。

ローマ時代の邸宅(Bil.4)が放棄された後に、大量の土砂約3mでこの遺構のみならず、この一帯が埋められ、その上に建物(Bil.1)が建てられた。

3.3. Bil.1、モザイク床を持つ建物

Bil.1の基礎壁はローマンハウスの壁を深く岩盤まで掘り下げて、バサルートの切石を3m以上積み上げている。こうして建物(Bil.1)の西端に10m×8mの部屋が作られ、また仕切り壁が設けられて他の部屋との区別が成されている。その床には色鮮やかな幾何学文のモザイクが貼られており、その部屋が特別な意味を持つ部屋であることがわかる。その東側の部屋には白色のモザイクが敷かれていた。この建物の東側の床にはモザイクは検出されなかった。ただ床には小礫が敷き詰められており、その状況はモザイク床の下地と同じ状態であった。モザイク床はカラフルで幾何学文様を作り出し、見事な出来映えであったが、その下地の土台部分は強固に固定されておらず、柔らかく、脆い状態であった。

またモザイクは地表下20cm程度で検出され、そのモザイクの状態は小さい粉末状の土が付着しており、モザイク文様も見えないほどであった。それは野晒し状態で長い間放置されていたことを示していた。またこの建物の中央の南側には大通りから入るための階段が敷設されていた。その階段の上り口はまず他より幅の大きいスタイロベートが並んでいた。そして入り口には一段と大きい円柱が立っていたと思われる、ただバサルート製の基礎壁の上には数個の石灰岩の切石が残存しているだけで、その上層部の建物の状況は不明である。周囲にはコラム、石灰岩の切石、大量の瓦、ビザンツ時代の土器片、ランプ、コイン、ガラス片、鉄釘、獣骨などが散乱していた。

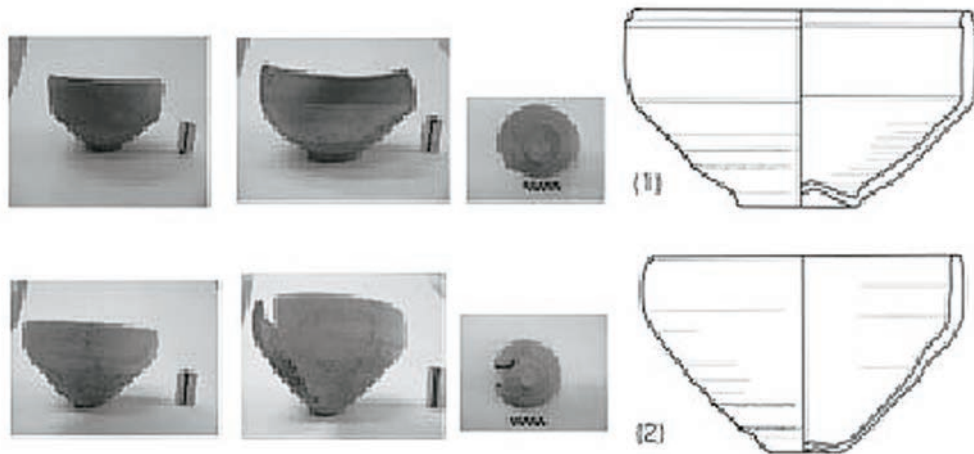


図3 ガダラボウルタイプ(ローマ帝国時代の末頃)

この建物の床のモザイク床の基礎部分からのC14年代測定を実施した。Bil.1(J14)モザイク床下AD60~480、Bil.1(H11)モザイク床基礎部AD340~430、Bil.2(スラブ床下基礎分)AD330~430、Bil.3モザイク床直上AD330~430、420~560であった。遺物の分析とC14年代測定から、4世紀初めのころの建築物であると言えよう。

3.4. Bil.2、テラス状施設

Bil.1の北側に附設されたテラス状の施設で、床にはモザイクが張られ、その中央には円柱が小さな方形の周りに立てられ、床にはスラブが貼られていた。その東側には、プラットフォームのような基壇があったと推定される。スラブの基礎部分からのC14年代測定ではBil.2(スラブ床下基礎部分)AD330~430と言う結果で、Bil.1の建設同様に4世紀初めの建設と思われる。

3.5. Bil.3

テラス状の遺構(Bil.2)の北側に4m程下がった区域があり、そこには南北に長方形の建物が建てられた(Bil.3: 大きさ22m×9m)。建物は大きく4つに区切られ、南端の部屋はそれを更に2つに区切っていた。その両部屋にはすばらしい幾何学紋様のモザイク床が貼られ、その北側にも、更に北端にもモザイクが床に貼られていた。中央の部屋は石敷きの床であった。入り口はこの東側に3つあり、各部屋に通じていた。モザイク床直上のC14年代測定からはBil.3モザイク床直上AD330~430、420~560であった。またこの建物の北西の基礎部分のR13の地下室からのC14年代測定ではAD350~370、AD380~440であった。因みにこの地下室を閉ざして、或は埋めてBil.3を建設している。それらから出土した土器やランプは後期ローマ時代から初期ビザンツ時代のものであった。

3.6. Bil.6

Bil.3の東側の通路を挟んで造られた関連施設は大きさ約7.5m×10mで、その四隅にはハート型の柱が立ちその間にはバサルト製の円柱が立ち並んでいたと思われるテラス状の遺構が確認された。

3.7. Bil.1、2、3、6遺構の再利用そしてBil.5の簡易施設

Bil.1、2、3、6遺構は改良しながら再利用された。またBil.5の遺構は、Bil.1の基礎壁にドラムや切石を積み重ねて壁を造り、小さな部屋を造っている。ただ屋根はテントを張って暑さを凌ぐような程度のもので季節的な、或は一時的な、簡易の部屋がこの大通り沿いに並べて造られたと思われる。遺物が少ないために時代の設定が難しいがウマイヤ朝と思われる。

3.8. コイン資料から見えるもの

上記のように、ヘレニズム、ローマ時代、ビザンツ時代の建物、遺物の年代が明らかとなってきた。また出土したコインは時代的背景の解明のための貴重な資料となる。Bil.1、2、3、4、5、6の建物からまたその周囲から出土したコインを分析し(江添誠による解説)年代順にしてみた。

前165~前63 ユダヤのハスモン朝(BC165~BC63)関係のコイン=4個。ハスモン朝に関してはコインが出土しているが、建築物など確認されていない。

前63~前48 ポンペイウス Ponpeius が統治した時期のコイン=6個。ローマンハウスがこの時期に相当するかもしれない。

前27~14 オクタ비아ヌスは前25年アウグスト Augustus となり、ローマ帝国時代が始まる。ただそれ以後、300年までの間に出土したコインは以下の7点のみである。



図4 背に十字架を拝する女性のメダリオン(4世紀前半)



図5 建物(Bil.3)の手前の床にはモザイクが貼られている。

この時期にローマンハウスが放棄された、また大量の土砂で埋められた時期かもしれない。

Claudius 41~54(2個)、Titus 73/74(1個)、Lucius 161~169(1個)、Divus Claudius II 270(1個)、Dio-cletian 297(2個)

そして突然 Constantine I 314~340のコインが多数出土し、その後も継続して出土した。

Constantine I 314~340(5個)、Crispus 324(1個)、Helena 325~326(Constantinus I)(1個)、Constantius II(次兄) 325~361(23個)、Constantinople 337~340(2個)、Constans 335~348 末弟のコンスタンス1世(4個)、Divus Constantine 337~348(2個)、Constantius Gallus 351~355(2個)、Valentinian II 375~392(11個)、Valens 367~375(1個)、Theodosius I 379~392(11個)、Arcadius 383~407(15個)、Theodosius II 404~435(4個)、Marcianus 450~474(5個)

上記のように Constantine I(5個)から Marcianus =5個 450~474 までのおおよそ100年の間にほぼ切れ目なく87個出土している。このようなコインの出土数をもって簡単に時代を論じることは避けなければならないが、Constantine I 314~340のコインが突如多数出土し、その後も継続してコインが出土した状況と、Bil.1の建設の時期が土器、ランプの分析、そしてBil.1のモザイク床の直下、或はBil.3のモザイク床の直上の灰の資料からのC14年代測定によって、330年前後の初期ビザンツ時代に建設されたという時期設定が可能となる。またそこにはコンスタンチヌス大帝 Constantine I、314~340による313年：ミラノ勅令によってキリスト教が公認されたことなどがBil.1の建設に大きく影響していると思われる。

また、このBuil.1、2、3、6から出土した遺物の中

には、十字架の付いた女性像のメダリオン、十字架の付いたランプ、教会堂のアプスの境に設置されるスクリーンと思われる破片などの遺物などキリスト教に関係するものが出土している。建物遺構についてはキリスト教会堂として様式がまだ定まっていない時期の最も古いキリスト教会堂の一つと言えよう。

そしてTheodosius II 404~435(4個)或いは Marcianus 450~474(5個)の頃にはBuild.1(キリスト教会堂)の役目が終わったと思われる。また土器についてもビザンツ時代後期の遺物は出土していないことからBil.1、2、3、6の建物に伴う活動が終わったと思われる。

そしてその後は、Umayyad Tiberias ?1個、及び数個の現代の硬貨の出土を除いて古銭は出土していない。

4. まとめ

Bil.4は中庭を伴った典型的なローマンハウスであり、出土する遺物もテラコッタやローマンガラス、ローマンランプ、アフリカンレッドスリップの土器など優れた遺物が出土した。しかし3世紀中頃にはこのローマンハウスも放棄されたようである。この原因については後に大量の土砂で埋められた状況などや Documanus Maximus(大通り)の南側に広がるフォーラムの状況(同様に大量の土砂の堆積がフォーラムの床上に見られる)と合わせて考える必要がある。

Bil.1(モザイク床を持つ建物)は土器、ランプ、コイン、またC14年代測定から、その年代は4世紀の前半と思われる。そしてその建物に関係する施設としてテラス状のBil.2が併設され、続いて北地区にBil.3、及びBil.6が建てられた。これらは一つのキリスト教会の集合施設であったと思われる。



12561

□□□

12561 P14&15 5 2 22.35 2.26 3.6,IMP C FL VAL CONSTANTINVS P F

AVG,Laureate head of Constantine I right IOVI CONSER_VATORI AVGG

Jupiter standing facing, head left, naked but for chlamys across left, shoulder, Victory on globe in right hand, scepter in left, eagle with wreath, before at feet, 314-315 Antioch? RIC VII, 11

図6 コンスタンチヌスのコイン(314年～315年)(江添誠解説)

■参考文献

- ・ Ezoe, M. 2010 The coins find catalogue Gadara-Umm Qais 2005-2008. *The Studies for Cultural Heritage vol. 3. Kokushikan University*: 85-98.
- ・ Ezoe, M. 2013 The coins catalogue in Gadara Umm Qais 2010 and 2011. *The Studies for Cultural Heritage vol. 6. Kokushikan University*: 39-52.
- ・ Ezoe, M. 2014 The coins catalogue in Gadara-Umm Qais 2012. *The Studies for Cultural Heritage vol.7. Kokushikan University*: 33-74.
- ・ Ezoe, M. 2015 The coins catalogue in Gadara-Umm Qais 2013. *The Studies for Cultural Heritage vol. 8. Kokushikan University*: 53-70.